一

抄　錄

◎急性及慢性膀胱加答兒ノ療法

(Deuts. med. Woch. No. 33. 1891.)

Boyer 氏ハ千八百八十六年以來膀胱加答兒ニ Fabiana imbricata ヲ稱用シ之レヲ Pichi ト名ケタリ又タ Laval 氏モ此植物ノ葉ヨリ製シタル水性越幾斯ヲ稱用セリ其法水製「ピチ」越幾斯三二、〇硝酸加里四、〇單舍利別九〇、右三時間毎ニ一茶匙ヲ與フL氏ニ從ヘハ此藥ハ膀胱加答兒ノ總テノ種類ニ効アリ且血尿ニモ奏効確實ナリト然レ𪜈武雷篤氏病アル者ハ禁忌ナリ如何トナレハ蛋白尿ヲ增加スレハナリ

◎痙攣性嘶嗄療法

同症ニハ左ノ藥液ヲ毎三十分一茶匙ヲ與フヘシ

クロールホルム	五－十滴	亞括二五、〇
グリスリン	五、〇	

◎麻拉利亞ノ「メチレンブラウ」療法

(Deuts. med. Wochens. No. 40. 1891.)

P. Guttmann u. P. Ehrlich ノ兩氏ハ「メチレンブラウ」ノ麻刺利亞ニ特効アルヲ報告セリ之レヲ用フルトキハ熱ノ發作欠如シ少ナクトモ第八日ニ至レハ血中ノ「プラスモシューム」消失ス今之レヲ用ヘント欲セハ化學的純粹ナル「メチレンブラウ」〇、一ヲ藥囊ニ包ミテ一日五回服用セシム、其全量ハ一日〇、五ニシテ八－十日熱ノ消失スル迄與フ此藥ノ不快ナル副作ハ輕度ノ膀胱刺戟症狀

ナリト雖ドモ肉豆蔻抹ヲ用フルニ由テ之レヲ妨クヿヲ得ヘシ

◎癲癇發作ノ療法

(D. m. W. 1891, Iro. 40)

此症ニ著効アル臭剝ノ奏効ナキ場合ニハ Poulet 氏ハ「カラバルト」丁幾ヲ伍用スルヿヲ稱セリ其法ハ百分ノ臭剝三十分ノ「カラバルト丁幾四百七十分ノ水ヨリナリ一日二回一—二茶匙ヲ與フ又「カラバルト丁幾ノ代用トシ硫酸エゼリン」ノ常量ヲ加フルモ可ナリ多クノ場合ニ於テ以上ノ二藥ハ大ニ奏効ヲ呈セリ

◎咽喉加答兒ノ療法

(Deuts. med, Woehens. No. 49 '91)

Ds. Cabrt 氏ハ咽喉加答兒ニシテ屢〻危險ナル症候ヲ呈スル者ニ左ノ藥劑ヲ稱用セリ卽チ內用ニハ

白楊(或ハ水楊)煎(一五、〇)　二〇〇、〇　水曹二、五
重曹　五、〇
又含嗽劑ニハ
假性アルミニュム　一、〇　亞爾箇保兒
グリセリン　各一〇、〇　亞括　二〇〇、〇
又屢〻反復スル者ノ豫防トシテハ
結晶石炭酸　五、〇　無水アルコール
薄荷油　五m
右十滴ヲ一茶碗ノ水ニ和シ少シク温メ朝夕二回含嗽セシム　(以上五項)　M、I、生抄譯

◎假性窒息ヲ有スル膐門水腫ノ療法

Mendoza 氏ハ此症ニ「ピロカルピン」ノ皮下注入ヲ稱用セリ其法ハ二十分間ニ八密瓦ヲ用ヘ三回反復スルニアリ第三ノ注入十五分后ニ至レハ呼吸ハ己ニ容易トナリテ危險症狀退キ八日以內ニ於テ治ス蓋シ膐門水腫ハ常ニ手術ニ由テ治スヘキ者ニアラス又之レヲ行ヒ能ハサ

ルヿ屢々之レアリ此ノ如キ場合ニハ此療法ヲ試ムヘキナリ

◎肺炎ニ坐魯兒

(Deuts.med. Woeh. No. 35,91)

Bosley氏肺炎ニ坐魯兒ヲ用ヘテ奏効ナルヿヲ報告セリ蓋シ又無効ノ者ニ非ラサルヘシ

◎乳暈裂創ノ療法 (同書)

Hirst氏ハ乳暈裂創シ「カストル」油ト次硝蒼鉛ノ等分ノ者ヲ塗擦スルヿヲ稱用セリ尤モ小兒ハ同側ノ乳ヲ呑マシムヘカラス若シ乳腺炎ヲ發スルトキハ阿片丁ヲ加ヘタル鉛醋水等ノ罨法ヲ行フヘシ

◎麥奴ノ皮下注入法

(Deuts. med. Woehens. No. 31, 01)

Biedert氏ハ「エルゴチン」皮下注入料ノ刺戟ヲ防ク爲メニ左ノ配合法ヲ稱用セリ但シ此法ハ又永ク貯蓄スルヲ得ヘシ

エルゴチン　一、〇　蒸留水　五、〇

結晶石炭酸　〇、〇一

◎癲癇患者ノ食餌 (同書)

Fergusson氏ハ同患者ニ對シ含窒素物ノ害アルヿヲ經驗シ單純ナル植物性食料ヲ用フルトキハ藥劑ヨリモ効アルヿヲ報告セリ

◎狂犬毒ノ簡易療法

(Deuts. med. Wochens. No. 36)

Prof. Galtier氏ハ犬ノ咬傷ニ對シ其毒ヲ消サンカ爲メニ帝列並油ノ多量ヲ以テ其創面ヲ洗滌スルヿヲ賞用セリ

◎肺動脈ノ血塞療法 (同書)

Fel氏ハ肺動脈ノ主幹ノ「エムボリ」ニ酸素吸入法ヲ用ヘテ治癒セシ者ヲ經驗セリ又己ニ一同死セシ同患者ニ於テ此ヲ用エ漸々蘇生セシヲ經驗セリ然レ𪜈此法ヲ止

ムルトキハ直チニ「チアノーゼ」窒息ヲ來セリト

◎結列阿曾篤ノ配合法　(同書)

Reviller氏ハ左法ヲ賞用セリ卽チ二—四、〇ノ「クレチソート」ヲ二五、〇ノ甘扁桃油ヲ溶シ之レヲ蛋黃及二〇〇、〇ノ氷ニ乳化セシムルニアリ

(以上八項)　飯森界外抄錄

雜錄

◎桂醫學士譯外科總論下卷二ヲ評ス

會員　田中咬石散史

桂醫學士曩キニ上卷一ヲ本會ニ寄送セラル不敏ノ散史「クリュッヘ」氏原著ニ就テ遂一順ヲ追ヒ相比較シテ終ニ二三ノ黃啄ナル批評ヲ呈シタリキ再來上卷二ト下卷一トノ發兌ヲ大旱ノ雲霓モ啻ナラス待チツツアリ何ントテ斯クモ次卷ノ上梓ハ遲キニヤト思ヒ燋レシ拆リモ拆リ豈ニ圖ラン今日下卷二ノ惠送ニ接ス「ハテハ」已ニ上卷二ト下卷一トハ出板セラレテ是ヲ購ハント欲セル數多學生ノ「ツルストドラング」ヲ「スチルレン」セラレタルヨナ散史否ナ本會獨リ其榮ニ預カラザルヅ(クンメルリッヒ)漢ハシキ

下卷二ハ第五編腫瘍論ニ始マリ各器官疾病要論神經性關節炎ニ終リ茲ニ完ク本書ノ大尾ヲ告ケ卷末附スルニ懇切ナル索引三十二頁ヲ加ヘ脫臼ヲ讀マント欲セハ下三一九骨拆ヲ見ント欲セハ下二三六ト開ケハ直チニ紙數ニ應シテ顯ハレ一病ヲ索ムルニ數時ヲ費ヤスノ煩ナク學生ニ取テ一秒千金ノ時秒ヲ消失セシメサル便ヲ與ヘタリ

又書中載スル所ノ記事ハ獨リ「クリュッヘ」原著ノミニ據ラス「レーマック」細胞直達分裂ヲ說明スルニハ五頁ニ亘レル圖アリ乳腺肉腫ノ橫斷面アリ表皮癌ノ二十倍

大ノ横斷ト他書ニ散見セルモノヲ摘採スルコト少ナカラスマタ以テ能ク勉メラレタリト謂フヘシ

其譯語ノ如キハ

Wie. aus der Entwickelungsgeschite bekant ist, entwickeln sich die verschiedenen Gewebe, so sehr sie spater auch in ihrer Struktur von einander abweichen, aus einer ursprunglich indifferenten Zellform, aus den sogenannten Bidun-gszellen. ヲ

夫レ人身組織ハ始メハ總テ成形細胞即チ不定細胞ト稱スル數個ノ同一ナル細胞ヨリ生スルモ毫厘ノ差完成ノ後遂ニ千里ノ別ヲ爲スニ至ルハ胎生學上人普ク信スル所ナリト譯スルカ如キハ實ニ學士ニアラスンハ能ハサル所ナリ

書中誤正ノ表ハ卷末ニアリ大冊ノ書ニ比シテ誤リハ五字ノミ能クモ正シク植字シタリト云フヘシ現今外科一汎ノ概論譯書ヲニテ知了セント欲セハ余ハ此書ヲモ他人ニ推薦スルニ躊躇セサルヘシ」

◎鈴木醫學士纂譯局所解剖學ヲ讀ム

辱交田中咬石散史

千八百八十四年出板「ストラースブルグ」府Jossel大學教授原著ノ凡例(プチールレーデ)ニ曰ク一千八百七十二年己來大學解剖學教授ノ任ヲ負ヒ常ニ解剖學ヲ學生ニ講演スルノ傍ヲ同時ニ外科學上各部解剖ノ位置對照及ヒ實地ノ應用ニ適切ナル事項ヲ以テシタルニ其利益ノ偉大ナルヲ經驗セリ是レカ故ニ佛國ノ如キハ已ニ好ンテ此種ノ著書ニ從事シ以テ彼國外科學上著明ノ光焰ヲ輝シタルモ我カ獨乙國ニ在テハ記載解剖書ノ行ハルヽ其數ノ許多ナルニモ拘ラス局所解剖ノ書ニ至テハ現ニ上梓セラレタルモノ實ニ僅微ナリ云々ト獨乙ノ醫學深源地ニシテ尙ホ斯ノ如シ況ンヤ本邦ニ於テヤ然ルニ帝國醫科大學解

剖學助手鈴木文太郎君多年此學ノ專攻ニ從事シ「ヨッセル」氏原著ヲ基礎トシ附スルニ本邦人体ニ就キ君カ得ラレタル所見ヲ加ヘ尙ホ且ツ諸書ヲ參照拔摘シテ此種ノ良書ヲ上梓セラレ名ケテ局所解剖學ト云フ余ニ今ソノ第一卷上肢篇ヲ惠送セラル繙テ拜觀スルニ紙數百二十「ページ」附スルニ上肢骨、筋、動脈、神經一覽表三十「ページ」ヲ以テシ加フル三書中載スル所ノ圖畫マタ其數少カラス是レ習ナ君ノ描寫ニ成ルト實ニ君カ此學ノ爲メ刻ル努力セラルヽノ深キヲ察セシム其正價ヲ問ヘハ僅カニ六拾錢ナリ蓋シ揷圖ト記事ノ正確ナルト紙數ノ比例ヲ推セハ頗ル廉ナリト謂フヘシ余ハ公言ス君カ此種ノ書ヲ上梓シ幾多ノ學生ニ好伴侶ヲ與ヘタルニ止マラス我國局所解剖ノ端緒ヲ開キ同時ニ將來外科學上マタ幾多ノ利益ヲ與フヘキモノナルヲ」「ペクニア」「アルモノハ買ヘ「スチーンチア」アルモノハ作レ與ホ此種ノ書ヲ

◎質疑

○Dyspepsieニ就テ　天外散士

〔第一〕Dyspepsieトハ如何ナル者ヲ云フヤ

〔附〕古來稱名セシ者ハ今日ノDyspepsieト全ク同義ナリヤ如何

〔第二〕Dysp.トハ一ノ症候ニ屬スル者ナリヤ將タ獨立ノ疾病ナリヤ

〔第三〕Dysp.ハ如何ニシテ起ルヤ

〔第四〕Dysp.ハ從來稱シ來リシ消化不良及消化障害及胃弱トハ同一ノ者ナリヤ否ヤ

本會記事

◎第二十七回常集會記事

同會は去月十六日午後一時より例の如く第四高等學中校醫學部第一教室に於て開會せり參集者二十二名にして山田謙治、志田伊之吉、飯森益太郎等諸氏の演說あり次て暫時休憩の間談話を始め木村孝藏氏は前會に於て飯森氏の演說せる竹を以て胸廓を穿通せし患者を會場に伴ひ其將さに治癒せんとせる創部及該部より摘出せる竹片等を會員に示せり終て裁判醫學上の討論に移り全く散會せしは午後五時過ぎなりし

◉第一席　山田謙治氏（授乳の利害）

載せて前號にあり

◉第二席　志田伊之吉氏（腦震盪の三ファル）

氏は一般腦震盪の原因勳理症候診斷預后療法を述へ次て氏か金澤病院に於ける三實驗に就て詳細に演說せられたり

◉第三席　飯森益太郎氏（黑色素癌腫に就て）

氏は一般色素性腫物の稀有にして殊に癌腫に來ることの稀れなるより說き起し其來歷、性狀、病理、等に至り終りに金澤病院にて手術したる腫瘍の標品を會員に示めされたり

◉裁判醫學討議　（强姦ナルヤ否—懷姙ナルヤ否）

十九年の婦人か三十六才の男子の爲め强姦せられ其時に懷姙せりと告訴したるものに就き鑑定を要するものにして其詳細は前々號に揭けたれは前に略す

右の問題に就き會員交々起て自說を述へ遂に議論二派に分れ甲は强姦され姙娠したるものとなし乙は和姦なりと稱へ各々論する所あり議論終るに至り出題者山田謙治氏は左の如く判決を述へらる

右乳暈着色、乳房膨大、厭に由て液を出し、腹部肥大し、子宮底を臍部に觸れ耻骨上部に浮腫ありて其下方に胎兒心音を聽取するを以て考ふれは、たけ、は目

下姙娠中にして大凡六ヶ月を經過せしものなり
陰部の形狀を按するに陰唇の離開少なく小陰唇桃紅色を呈するは數回交接せしものにあらざる徵候にして膣の潮紅、頸管内粘液の充塡は姙娠の爲め發せし症狀にして交接の頻回なりし証とするに足らず然れども、たけ、か姦淫せしは處女膜裂創にて明かな事る實にして而して其姦淫には暴力を用ひし証は彈力性の比々厚き膜破裂し而も其破裂膣部に及ふを以て知るへし
果して然らは婦人を一人にて強姦し得へきや否、凡そ婦人は男子よりも疲勞し易くして卒然の攻擊を受け驚駭恐怖して身体不隨意或は人事不省となりたる例少なからす今たけの体格は軟弱なるにあらされとも不意に投けられたるを以て運動不隨意となりしものか假りに之を和姦なりとせは爾後數〻會すへき合ものなれとも望見上交接の數〻なりし成績なく事實上に於ても、たけ、と吾助の間は親密ならさるか如し受胎には敢て數回の交接を要せす又敢て女子の快美あるを要せす精液子宮内に達し恰も卵子と會するを得は乃ち受胎するものにして實驗に徵するも月經後には受胎し易きか如し
故に、たけは強姦せられ爲めに姙娠せし者と鑑定す

◎會員動靜

◉會員本多鎗二氏　は今度陸軍一等軍醫に昇進せられたり

◉會員瀨尾原始氏　第三高等中學校敎授醫學士同氏は非職を命せられたり氏は故鄕新潟縣高田に於て瀨尾昌索氏と共に一大私立病院を設けられ氏は其外科醫長を勤めらるゝ由に聞く

◉會員小原芳雄氏　陸軍三等軍醫仝氏は從來歩兵第六聯隊(在名古屋)附の處今度仝第二十三聯隊附(在熊本)に轉せられたり

◉會員笹川宗治、仝野口詮太郎、仝篤尾明濟、仝沼田布之の四氏　は共に今回陸軍三等軍醫を命せられ笹川氏は歩兵第九聯附(大津)野口氏は歩兵第三聯隊(東京)附篠尾氏は歩兵第六聯隊(名古屋)沼田氏は歩兵第十七聯隊(仙臺)附に各々補せられたり

◉會員勝木直吉、仝森亮、二氏　は共に去月廿六日第四高等中學校裁判醫學實驗委員を拜命せり

◉會員津川恒氏　は這回金澤市河原町七十二番地に移轉せられたり

◉會員志田伊之吉、鶴見金十郎の二氏は一年志願兵として來十二月一日入營せらる

◎第二十九回常集會記事

同會は去る廿一日午後二時より當醫學部第一教場に於て開きぬ、會する者總て十二名木村孝藏、黒柳精一郎兩氏か演說の外顯微鏡寫眞器の應用等あり次て二三の談話をなし全く散會せしは午後五時三十分頃なりき

◉第壹席木村孝藏氏(Nearthorose)に就て

氏は三十五年の一男子か稀有なる特發(?)重骨折後假關節を造りし者に手術を行ひ良成蹟を得たる者を報告し且つ假關節に就ての種々なる實驗談をなし終りに其療法を概論せられたり

◉第貳　席黒柳精一郎氏(十二指腸虫に就て)

氏か金澤へ赴任せられし以來實驗せし十數名の同症患者に就ての病床經過、療法等を述へ結論して曰く『石川縣は確かに十二指腸虫の流行地なれは余は貧血の患者を診する毎に其大便を鏡査せしに十中の五六は虫卵を發見せり云々』と、且つ同患者四名を會場に伴ひ會員に

示されたり其他志田伊之吉氏の『足關節炎の療法に就て』なる演說ある筈なりしか時間の都合に由り次會に讓る事とせり、

◎寄贈雜誌

北海道醫事講談會月報第三十號……同會
京都醫事會雜誌第四十五號……同會
緒方病院醫事研究會申報第四十四號……同會
杏林之栞第三卷七號……同會
大坂興醫學社月報第三十四號……同會
岡山醫學會雜第二十二號……同會
裁判醫學會雜誌第四十七號……同會
熊本醫學會雜誌第五十九號……同會
輓近外科學會報告第三十二號……同會
國家醫學會雜誌第五十三號……同會
成醫會月報第百十六號……同會
東京醫學會雜誌第五卷二十號……同會
千葉醫學會雜誌第一號……同會

時事

◉千葉醫學會雜誌の發行

獨乙國か今日の如く醫學の旺盛を極め他國の遠く企て及ふへからさるは同國人か殊に研究的の思想に富むか故なりれと雖も然とも亦た醫學上の雜誌多くして其扶をなせしや疑ひを容るへからす、されは科學的雜誌の多少は暗に其盛衰如何を代表する者と云ふも大なる過なかるへし、近來本邦に於ても斯學の進步に伴れ續々醫學雜誌の增加するは我道の爲めに賀すへく喜ふへき事なり近領千葉縣に於て千葉醫學會雜誌なる者を發行し本會へも其一部を送れり今之れを通覽するに論說、抄錄、本會記事、官令、時事彙報等の數欄分ち、筒井秀次

郎氏の黴菌檢査法、三輪德寛、筒井八百珠氏の古保氏液實驗報告、中村彌一郎氏の肺結核屍剖檢記事今野英氏の慢性淋疾に就き、三輪醫學大岡善次郎幡谷貫造三氏の右眼窩內囊腫の實驗森理記氏の鑑定書等有益なる記事數十箇より体裁は中外醫事新報と瓜二つにして恰も其兄弟にあらざるかを疑はしむ、兎に角余輩は千葉醫學會雜誌第一號を評するに『旃檀は二葉より芳ゐ』なる一句を呈せむと事

◉石川縣の三寄生蟲

石川縣ガ肝臟ジストーマの流行地なる事は曩に界外子か口を極めて論せし處なり、近頃亦た肺ジストーマ患者能洲の奥より現はれ、十二指腸虫患者續々病院に來る、是れを石川縣の三寄生虫と云ふ。

◉金澤病院彙聞

●鶴見金十郎氏　來月一日より一年志願兵として當聯隊へ入營せらる同氏は願に於て同院醫員を解かれたり

●志田、生駒の兩氏　囑托醫員志田伊之吉、生駒廣太郎の兩氏も同しく去る二十九日依願解職せられたり

●新病室の落成　屢々前號に記したる同院の新病室は愈々出來せしを以て來月々初より患者を入るゝ都合なりと云ふ

●便所浴室の出來　亦た先月以來新築中なりし便所及浴室も不日落成する由にて其建築費は三百五十餘圓なりと云ふ

●臨時監獄醫の兼務　宇野氏辭職以來專任の監獄醫なきを以て同院の池上政雄氏は臨時監獄醫を申付られたり

●腸窒扶斯患者　毎年秋頃には多少同病の流行を見るを常とするか本年は殊に多くして同院に治を乞ふ者のみにしても八九名あり現に木村醫學士、川瀨醫學士の

兩夫人も同症の爲めに惱まされつゝありしか目下大に快方に趣けりとそ

●外來及入院患者數　目下同院の入院患者は內科　名　外科　名　眼科　名　產科婦人科　名　施療患者　名にして外來は一日の平均　名なりと云ふ(廿九日調)

◉送別の宴

此度醫學部助手志田伊之吉、生駒廣太郎、淺野駒太郎の三氏及ひ金澤病院醫員鶴見金十郎氏か一年志願兵として當聯隊へ入營せらるゝに付き福島猪太郎、笠間大作、飯森等の諸氏發起人となり去りぬる廿九日午後四時より殿待樓に於て送別の宴を張りぬ來會者は木村、高安、有松、村山、櫻井の諸教授及ひ助教授、助手事務員、金澤病院員等無慮二十餘名なり席定りし頃發起者は立ちて開會の挨拶をなし次て田中正鐸氏は例の達辨を以て『入營諸君に望む』と題して一場の演說を爲し終りに生駒廣太郎氏は總代として謝辭を述へられたり酒間校書數名周旋し、絃歌洋々たる處忽にして劍舞を躍るあり、和氣靄然たる處倏矣として相撲を角するあり其他吟するあり、歌ふあり、叫ふあり、話るあり、拳を鬪すあり、碁を圍むあり、千態万狀一々筆紙の盡す處に非らす、互に歡を極め散會せしは午後十時半頃なりき

◉又た

去る二十五日午後三時より北越醫會金澤支會々員諸氏は右三氏を小松軒に招き送別の宴を張られたり會する者總て三十餘名瀨尾順四郎氏開會の主旨を述へ志田伊之吉氏謝辭をなし酒間互に胸襟を開き充分歡を盡したる后散會せしは公會堂の鐘十時を報するの時、

◉醫術開業試驗及藥劑師試驗

內務省告示第五十六號を以て明治二十五年醫業開業試

驗及藥劑師試驗は左の如く施行地及時日を定められたり

醫業開業試驗

東京府下東京市　四月十日
京都府下京都市　五月五日
長崎縣下長崎市　四月十五日
長崎ニ於テハ齒科試驗ヲ擧行セス

藥劑師試驗

東京府下東京市　五月二十九日
大坂府下大坂市　五月二十五日

◉開業試驗受驗者心得

內務省告示第五十七號を以て醫術開業試驗竝藥劑師試驗願書は自今本人之を自書し且當年若くは其前年に寫取りたる寫眞一葉を添附すへき旨達せられたり

◉衞生局長又々交迭の風說

吾人は最新思想を有せる內務ゞ羽振よき荒川邦藏氏を衞生局長に得て今後我邦衞生上進步の點に待期する所掛からさりしに此頃傳へ聞く所に據れは氏の同局長兼任は暫時の事にして實際の候補者は夙に同屬の利者たる目下洋行中年內には歸朝すへしと云ふ三等技師後藤新平氏に定りあり卽ち同氏の歸朝と共に荒川氏の現兼任を解きて專任參事官に復し而して後藤氏昇任すへき筈なりとのこと是れ事實に近きもの〻如しと藥業雜誌は云へり

◉金澤病院の手術數（四十二名）

金澤病院外科に於て九月一日より十月三十一日までに手術せし者は左の如し

病名	姓名	年齡	職業	術式	轉歸
左足外踝部蜂窩織炎	寺田與次平	六二	農夫	切開	全治

左尺骨下端復雜骨折	大窪豐次郎	一三	學生	副木回定	同
左脛骨下端腐骨	大木次郎	五三	酒商	切開摘出	同
右陰囊水腫	淺田吉太郎	三九	巡査	切開法	半治
右腹筋間膿瘍	大西仁三郎	一〇	農兒	切開	全治
右腋下水脈腺腫	岸ミツ	二二	無業	摘出縫合	同
右大腿下端腐骨	山下イヨ	一〇	農娘	切開摘出	同
背部カルフンケル	大屋又三郎	四九	中買	切開剝離	同
右脛骨全腐骨	吉井文政	一一	學生	切開一部摘出	半治
左乳癌腫	中谷ヒナ	五一	農婦	切開摘出	全治
右內轉股筋炎	奥野仁三郎	二、九	農兒	切開	同
肛門鋭尖コンシロム	舘村アヤ	二七	受酒	切除縫合	同
右脛骨腐骨	鍛冶豐作	一四	農兒	切開摘出	同
左濶背筋炎	加藤千吉	四、九	無	切開	同
右大腿下端腐骨	溪弘	一四	學生	切開摘出	半治

全直腸瘻	長田ミツ	一八	醬油	切開	全治
左脛骨中部腐骨	大岡佐吉	一六	紙商	切開摘出	同
左手掌蜂窩織炎	岩本キン	六〇	無業	切開	死亡
竹胸廓穿孔性創傷	町榮太郎	一四	農童	摘出防腐帶	全治
左上膊フレクモヲ	今川與次	六年	農兒	切開	同
右掌屈筋腱炎	諸江與三郎	二〇	農夫	同	同
左斜頸	杆野シヶ	一七	無	腱切斷	同
第五頸椎棘狀變起骨折	太田德太郎	一七	農夫	義布斯固定	半治
中及內痔瘻	松田三七郎	三七	農士	燒切	全治
右棘下筋炎	竹下外次郎	二六	車夫	切開	同
左助膜下膿瘍	村太一郎	二一	無兒	切開	死亡
外傷性瘢痕狹窄	大野彌一郎	三六	農夫	武字擴張	全治
右十臀筋炎	村田庄太郎	三九	農夫	切開	全治
前腹壁膿瘍	守田彦次郎	一六	同	同	同

全痔瘻	山本進	二四	學生	同	同
左脚膿瘍	淺はる	三一	無業	同	同
黑色素性紡純形細胞肉腫	野村喜右衛門	七四	農夫	切除	同？
上膊骨外顆骨折	竹内精一	一四	學生	固定	同
左大内轉股炎筋	金谷喜十郎	四、一	無業	切開	同
肛圍膿瘍	松下タミ	一五	吳服	同	同
右顎下部膿瘍	石田文之助	三二	紙商	同	同
實布的里	庄田政次	四、二	無業	環狀氣管切開術 ミーロ、ランゲンベック氏法	死亡
右單兎唇	吉森吉次郎	〇、一	農兒		全治
護謨腫	中村外次郎	三一	無業	摘出縫合	半治
右肩胛部脂肪瘤	朝愈タキノ	四三	僧妻	切除縫合	全治
包莖	北山庄助	三七	農夫	背側截開	同
右第十助骨々腐骨	嶋村勝太郎	二三	糸商	切開	半治
外痔瘻	清水源次	六一	硝子	燒切	全治

直腸脱	黒田又四郎	四一	商	燒灼	半治
左大腿下端腐骨	稲葉和三郎	一四	農兒	切開摘出	同
斜頸	元平淳心	二	學生	テノトミー	同

廣島醫事概況

（廣島特報YI）

廣嶋西部醫會　同會は去月十四日午后七時より鍛治屋町松尾方に例會を開き村上禎之輔（一奇症）長崎正平（赤痢ニ續發セル紫斑病）今井亥三松（蕁ノ繃帶材料）の演說あり了て散會せしは同十時頃なりき

醫學士及病院數　市内には醫學士五名あり卽ち齊藤爲信、後藤武彦以上廣島病院嶋田完吾、能勢靜太以上衞戍病院遠藤洋業にして病院は四ヶ所あり廣島病院（院長齊藤爲信）博愛病院（仝季家文厚）三樹病院（仝三木達）濟壽館（仝後藤靜夫）なり

死亡數　市内に於ける九月中の死亡數を聞くに男百〇七人女八十六人死產男十八人女四人なりと

廣告

裁判醫學會雜誌改良稟告

我邦百般ノ學術技藝中特ニ長足ノ進歩ヲナシタルハ法學及ヒ醫學ノ二者ヲ以テ其最トス然ルニ此ノ二者ト共ニ相伴隨シテ其進歩隆盛ヲ來サヽルヘカラサル所ノ裁判醫學ニ至ツテハ未タ廣ク之ヲ講究スル者ナク又之レカ必要ヲ感スルモノ殆ント尠キカ如シ是ヲ以テ其死傷ヲ險シ毒物ヲ査察スルカ如キモノ及ヒ其罪證檢按ノ方法等ニ至ツテハ概ネ之ヲ舊慣ニ付シ去リ亦精細緻密ノ檢査ヲナスモノナキニ似タリ是レ蓋シ精細緻密ノ檢査ヲ要ス可キモノナキニ非ス職トメ其檢査ノ必要ヲ知ラサルモノ多キニ由ラスンハ非サルナリ

今ヤ人智ノ進歩スルニ從ヒ惡事ノ又增長スヘキハ自然免レサルノ數ナレハ奸黠狡智ノ徒隱然兇行ヲ遂ケ以テ巧ニ其犯跡ヲ蔽フモノナシト云フ可カラス此ノ時ニ當

リ唯々舊慣ニ是レ從ヒ輕々罪證ノ檢定ヲ了ヌルカ如キハ實ニ危殆ナルモノト云ハサル可カラス故ニ今其從來ノ檢視若クハ鑑定ノ法ヲ一變シ之ヲシテ精且密ナルニ至ラシムルノ必須緊要ナルヿハ爰ニ贅言スルヲ要セス然リト雖ヒ這ハ一朝ニシテ爲シ得ヘキヿニアラス法官警官辨護士等ニ於テハ裁判醫學ノ大要ヲ熟知シ其鑑定ノ精粗當否ヲ認知スルノ識ヲ具ヘ又醫家ニ於テハ鑑定上日新ノ醫學ヲ應用シ以テ充分ナル鑑定ヲ下シ得可キノ技ニ通スルニアラスンハ能ハサルモノトス故ニ明治廿二年五月十六日本會ヲ起シ醫科大學教官其他諸大家ノ贊成ヲ得裁判醫學上其應用ノ最モ頻繁ナルモノ卽チ檢傷檢屍檢毒等ノ方法及ヒ此等ニ關スル諸學說若クハ講義ヲ主トシ尙裁判醫學ニ關係アル時々ノ出來事ニ關スル諸說ヲ採集シ雜誌ヲ發行シ積ンテ第四十六號ニ至リタルモ人智ノ進步ト裁判醫學ノ隆盛ニ準シ隔靴搔痒ノ嘆ヲ免カレサルヲ以テ今茲改良ノ必要ヲ感シ醫科大學第一醫院詰醫學士馬島永德君本會々主ノ責ニ當ラレ代言人阿部莊吉君亦編輯ノ事務ニ從事セラレ大ニ規摸ヲ擴張シ雜誌紙面ニ改良ヲ施シ廣ク該學ノ必要ヲ喚起シ普及發達ヲ計畫シ明治廿四年十月五日ヲ以テ第四十七號ヲ發行シ爾來引キ續キ左ノ規則ニ從ヒ之ヲ印刷ニ付シ以テ廣ク會員ニ頒チ該學研究ノ資料ニ供シ檢視鑑定ノ方法ヲ改良スルノ一大要素ト爲サント欲スルナリ然リト雖ヒ本會ノ主旨及ヒ其目的タル首トシテ裁判醫學ノ普及發達ヲ計ルニアリ左レハ本會雜誌ノ載スル所其程度低クシテ記事自ラ通俗ヲ勉ムルカ故ニ未タ以テ專門醫家ヲ益スルニ足ラサルヘシト雖ヒ死傷ノ鑑定等ヲ爲スニ際シテハ其原則ヲ日新ノ醫學ニ採ラサルヘカラス而シテ其日新醫學ニ關スルヿハ本會ノ主トシテ其採擇ヲ怠ラサランヿヲ期スル所ナレハ本會雜誌ニ揭クルノ所モノハ醫家諸君ニ對シ固ヨリ稗益スル所ナキモノト云フヘカラス然リ而シテ現時法官警官辨護士等ニシテ既ニ本會々員タルモノ其數少ナカラサレハ爾來法官警官辨護士等ニ於テ醫家ノ立會ヲ要シ若シクハ鑑定書ヲ徵スル等ノ場合ニ遭遇セハ其用意ノ深淺蓋シ亦昔日ノ如キモノナカラントス故ニ今醫家諸君ニ告クルニ本會ノ主旨及ヒ本會カ現時ノ情況等ヲ以テス伏テ乞フ諸君本會ノ主旨幷ニ目的ノアル所ヲ諒察シ速ニ本會ニ加盟アランヿヲ

規則

第一條　本會ハ裁判醫學研究ノ爲メ設立セルモノニシテ何人ヲ問ハス何時ニテモ同志者ノ入會ヲ許諾ス

第二條　本會ハ毎月二回(五日 廿日)裁判醫學會雜誌ヲ刊行シ之ヲ會員ニ配賦ス但シ本誌紙數ハ大約四十「ページ」以上トス

第三條　會員ヨリ裁判醫學上緊要ナル質疑アルトキハ本會ハ之ヲ本會ヘ寄稿ノ諸家ニ質シ爾後所刊ノ雜誌ニ之ガ答案ヲ掲グベシ

第四條　本誌載スル所ノ諸說及ビ講義ハ詳細ニシテ且平易ノ文字ヲ用ヒ醫學ノ用語身体各部ノ位置形狀等ニ關スルモノニハ傍訓解釋若クハ畧圖ヲ掲ク

第五條　毎號所刊ノ本誌ニハ人身解剖講義ヲ掲ケ以テ身体各部ノ名稱位置形狀等ヲ了知スルノ便ニ供ス

第六條　入會ヲ望ム諸君ハ入會申込ノ節住所氏名ヲ記シタル入會申込書ト共ニ會費ヲ送付セラルヘシ

第七條　本會々員ハ左ノ會費ヲ前納セラルヘシ

會費一ケ月分〔東京市內會員 金十五錢 / 東京市外會員 金十六錢(郵稅ヲ含ム)〕

憲兵巡査看守諸君ニ限リ會費一割ヲ減ス

在東京會員ノ會費ハ毎月二十日後ニ其住所ヘ向ケ本會ヨリ領收人ヲ出スヘキニ付翌月分ノ會費ヲ渡サルヘシ●地方會員ハ毎月二十日迄ニ翌月分ノ會費ヲ郵便爲替或ハ通運便等ヲ以テ拂ヒ込マルヘシ但シ右送金方不便ノ地方ニ在リテハ五厘郵便切手ニ限リ一割增ヲ以テ代用苦シカラス又會費數箇月分ヲ一時ニ拂ヒ込マルヽモ妨ケナシ

郵便爲替ハ東京市神田區錦町三丁目五番地裁判醫學會宛ニテ東京市神田郵便支局ヘ向ケ振込ムヘシ

第八條　本會ニ於テ會費ヲ領收シタル後領收チナ要セラルヽ諸君ハ會費ト共ニ葉書代一錢ヲ送付セラルヘシ

第九條　會員若シ住所氏名ヲ變更セシトキハ速カニ其旨通知セラルヘシ

○本會雜誌ハ既ニ第　號迄發行致候

○本會雜誌ノ既ニ發行セシ分第壹號ヨリ取揃ヘ御入用ノ諸君ハ此際ニ限リ左ノ會費ヲ以テ遞送スヘシ但シ貯藏ノ部數盡キタルトキハ謝絕スヘシ

第一號ヨリ
第　號マテ　(　冊)會費　(遞送料共)

明治二十四年九月五日

東京市神田區錦町三丁目五番地

裁判醫學會

私儀

今度河原町七十二番地へ轉居仕候間此段會員諸君ニ廣告ス

津川恆

叔父嘉博儀病氣ノ處療養不相叶十一月　日死亡仕候間此段辱知諸君ニ告ク

會員納富嘉太郎